中学校の部　最優秀賞

ものづくりから学んだこと

大田区立東蒲中学校　三年
今井　藍

私は、昨年の夏休みに、大田区主催の『ものづくり実技講習会』に参加しました。そこでは、ミシンを使った小物作り製作を行うことができ、私はミシン縫いが苦手だったから、この実技講習会を通して、ミシン操作が上手くなれたらいいなと思い、軽い気持ちで参加しました。

実際に実技講習会に参加してみると、大田区の家庭科の先生方が、すごく丁寧に教えて下さり、軽い気持ちでやってはだめだと思いました。これは、真剣にやらなくてはと思い、一つ一つの説明やアドバイスを頭に叩き込みながら作業をしました。初めて使ったロックミシン、チャコペーパーやルレットを使っての印つけなど、いろんな作業がすごく楽しかったです。そして、私は、この講習会に参加したことで、冬に行われる大田区の『ものづくり学習フォーラム』の競技会（ソーイング部門）への出場を決意しました。苦手なことでも何度も挑戦すれば、必ずできるようになると感じたからです。

二学期からは、ものづくり競技会に向けて準備をはじめました。今年の競技会の製作内容は〝シューズ袋〟でした。まず、デザインを考えました。妹のために上履き袋を作ろうと思っていたので、妹が気に入るデザインをたくさん考えてみました。でも、なかなか納得できるデザインがみつかりませんでしたが、家の中にあった絵本がきっかけで、デザインが浮かび上がってきました。青虫の頭と胴体を花のコサージュで縫いつけるデザインです。あと、ひと工夫ほしいなと思い、流行っていたエコバックにヒントをもらい、小さくコンパクトに折りたためる形にしようと思いました。そのために、ポケットを付け、そのポケットをひっくり返し、そこへ小さく折りたためるような形にしようと考えました。使ってもらう人に気に入ってもらえるようなデザインを考えるのも大切だと思いました。

早速、型紙を作り、裁断をして縫ってみました。いざ、作ってみるといろいろと問題が出てきました。ポケットが小さすぎて折りたたみ込むことができなかったり、折りたたむと裏返しになったポケットの縫い代が見えたりと、作ってみないと分からなかったことがたくさんありました。問題点を先生や母と一緒に直していき、完成することができました。何回も作っていくうちに、だんだんコツをつかんできました。

競技会当日、とても不安でした。失敗しないだろうか、時間内にうまく仕上げることができるだろうかと心配でした。でも、そんなことを言っている場合ではありませんでした。審査員の先生方がたくさんいて、一つ一つの作業工程をチェックされていたので真剣にやりました。間違えないように、丁寧に…。練習したかいがあり、裁断もミシン縫いもうまくできました。途中で、別布で作った青虫のパーツ（花のコサージュ）の糸がとれてしまったり、フックの位置がずれたりしました。でも、周りの先生方が「落ち着いて」と、声をかけ

てくださいました。それで、少し焦りすぎたかなと思い、ゆっくりやりました。約四時間に及ぶ競技会でしたが、終了五分前に作り終わり、ホッとしました。今まで作ったシューズ袋の中で一番うまく作ることができ、嬉しかったです。

審査結果は優秀賞でした。自分でもビックリしました。ミシンが苦手だった私が、優秀賞をとれること自体、信じられませんでした。でも、作り終わったときの喜びや達成感が一番大きかったと思います。いろんな苦労があったからこそ味わうことができた喜びでした。ものづくり競技会を通して、ものを作ることがもっと好きになりました。

夏の実技講習会で学んだ、苦手なことでもあきらめずに何度も挑戦することの大切さ。ものづくり競技会では、使う人のことを想って作ることの大切さ。被服実習や調理実習の家庭科の授業では、作ることの喜びや手作りの温かみ。すべての学びが自分自身の生活に大切なことでした。

ものづくりを通して、学んだことを忘れないで、これからの生活に活かしていきたいです。

中学校の部　優秀賞

全て必要な仕事

大田区立馬込中学校　三年
岩森　咲季

私が、今回の職場体験をした場所はスーパーです。

「いらっしゃいませ！」

普段なにげなく聞いているこの言葉を、私自身が言う側に立ったり、お客さんからは見えないところの仕事をやったりしました。何もかもが初めてで、とても新鮮でした。緊張したけれど、仕事を自分から積極的にやるよう心掛けました。

一日目はおそうざい作りを体験しました。主に焼き鳥作り、お弁当の盛り付け、コロッケ作り、そして品物にシールを張ったり、並べたりしました。そこで私は、服装や料理の道具、お店の形などの三つの工夫に気付きました。一つ目は服装です。私が思っていた服装は、白い帽子に白衣でした。しかし、実際は白い帽子を被る前に網の帽子を被ります。これは絶対に髪の毛が落ちないよう、帽子を二重に被る工夫がされているからです。私は、こういった外見から見えないところも気を遣うことで、私達に、安心して食べられる品物の信頼を得ているのだと思いました。二つ目はコロッケを揚げる時に使う、大きな鍋にあります。サクッとしたおいしいコロッケは、とても高い温度で揚げなければなりません。特に、おそうざいコーナーではコロッケなどをたくさん作るので、鍋へ入れ

る時に油が跳ねたらとても危険です。しかし、使われている大きな鍋は端が斜めに傾いていて、そこにコロッケを滑らせながら鍋へ入れることができるのです。それでもやはり大きな鍋の近くは熱く、そんな中でも一生懸命コロッケを作る人の姿はとてもかっこう良かったです。三つ目はお店の形です。店員さんからはお客さんの様子が、お客さんからは店員さんの様子が見られます。このおかげで、あいさつやお勧めの品物などを話題に店員さんとお客さんの会話が多く見られます。お店の形にはコミュニケーションがとれる工夫がされていたのです。そんなおそうざいコーナーはいつも笑いの絶えない明るい仕事場でした。

二日目は、スーパーの中にあるパン屋さんで体験しました。主にパンを切ったり、並べたり、本当に色々なことをしました。その中でも一番驚いたことは、パン屋さんなのにカツサンドのカツを作っていたことです。私は同じ店内にあるおそうざいコーナーのカツを使うのだと思っていました。しかし、ここのパン屋さんは、自分で作ったパンにはさむものは自分で作ってしまうのです。何でも作ってしまうパン屋さんはすごいと改めて思いました。そして、店長さんは言葉で教えるのではなく、やっているところを見せて教えて下さいました。私はそれをしっかり見て、できるだけ上手にできるように頑張りました。そうしていくうちに、

「パンのラッピングが上手だね。」

と誉められました。とてもうれしかったのでさらに頑張りました。店長さんもこうやって仕事をしていきながら上達していったのだと思いました。

最終日の三日目は、最初に野菜コーナーの仕事を体験しました。主に品物にシールを張ったり、並べたり、運んだりしました。品物を並べるだけでもどのように置くのかよく考えなければなりません。例えば、ニンジンは三角の形をしています。ですから、ただ同じ方向に並べ、積み上げただけでは、片方が高く積まれ、もう片方が低く積まれるのでバランスが悪く、崩れやすくなってしまいます。そこで、ニンジンは一つずつバランスを考えながら向きを変え、積み上げなければならないのです。実際にこうした作業をやってみて、時間がかかり大変な仕事だと思いました。次にレジを体験しました。

「いらっしゃいませ！」

「ありがとうございました」

は当たり前に聞いていたけれど、お客さん一人一人に言うので、顔の筋肉が疲れました。最初は恥しく小さな声でしたが、だんだん慣れると大きな声で言えるようになりました。同じくバーコードを探すことが難しく、なかなか上手にできませんでしたが、バーコードの位置を覚えると、さらに楽しくなっていきました。そして、この仕事に慣れた頃には、三日間の職場体験も終わりました。

この三日間、店員さんが優しく教えて下さり、とても明るい雰囲気の中で体験授業ができました。しかし、そんな楽しいことばかりではなく、働く大変さも知りました。食品をつくる、レジをする、物を運ぶ、全てのものが手を動かす作業でしたが、なぜか足が疲れていました。それはきっと長い間立ち続けていたからだと思います。そんな辛さを知り、私は

普段長い間立ち続けながら、私達に勉強を教えて下さる先生方に改めて感謝したいです。そして、いつも働いている父や母、生活で必要なものを作って下さったりする方達にも感謝したいです。私が大人になったら、感謝をされる側に立ちたいです。

職場体験で学んだこと

墨田区立両国中学校　三年
黒　川　歩　唯

「似合うよ」。これは、ある女の子が私に言ってくれた言葉です。私は、この言葉を聞いた時、ある決心をしました。

私は、小学校に入学するまで保育園に通っていました。ですから、生まれてからの何年かは、両親よりも保育士さんと一緒にいた時間の方が長かったかもしれません。そして、その頃、一人のかっこいい保育士さんと出会いました。その人は三十代の女性でとても厳しい人でしたが、でも、日焼けした顔に笑顔が似合う、凛々しく頼りになる人でした。そして、卒園してからというもの、私はなんとなく、将来はあんな保育士さんになりたいなぁ、という漠然とした希望をもっていました。

中学校に入学してすぐ、二年生になると職場体験という授業があることを知りましたが、小さな頃のそんな記憶もあったし、元々子供とふれ合うのが好きなので、その時から職場体験の希望も保育士と決めていました。最初の「似合うよ」という言葉は、私がその職場体験で保育士をした時、私の「保育士になりたい」という将来の夢を聞いた年長組の女の子が言ってくれた言葉です。そして、私はその時、はっきりと保育士になりたい、と思ったのです。

その職場体験の当日、私はわくわくしながら保育園の門を通り、子供たちのいる部屋に向い、ドアを開けました。するとそこには、たくさんの子供たちがいて、それは夢に描いた光景であるものの、逆にどうすればいいかとまどってしまいました。でも、こんな体験ができるのはめったにない事なので、勇気を出して、ブロック遊びをしている子供たちに「私も一緒に遊んでもいい？」と話しかけてみました。すると、その子供たちは「いいよ」と言ってくれたので、私は少し安心して子供たちの中に入っていきました。しばらくすると、だんだん子供たちが寄ってきて、私は嬉しくて、もっと色々な子に話しかけてみようと思いました。

そして、私がみんなと外で遊んでいた時のことでした。ある男の子が突然転んで、泣いてしまいました。私はどうすればいいのか、しばらくその場で立ちつくして迷っていたのですが、ある保育士の方がすかさずやってきて、「どうしたの？大丈夫、痛くないからね。」とその子に優しく話しかけ、部屋に連れて行きました。少し注意して見ていると、子供がわがままを言った時はしかったり、けんかした時は仲直りをさせたり、良いことをした時はほめたり、保育士の方々は子供にその時に応じてちゃんと対応していました。私は「子供の心が分かっているんだなぁ」と思いました。そんな様子を見ながら、私も気を付けながら色々な子供たちに話しかけてみま

した。

やっぱり保育士の仕事はいいなぁ、とそんなことを思い始めた頃、昼寝の時間になりました。それまでは本当に楽しい時間でした。けれども、子供たちが寝付くと、保育士の人たちはあわただしく、窓や床の掃除などを始めました。子供たちには見えていないところでこんなに仕事をしていたのかと、私は驚きました。そして、昼寝の時間が終わった後も、子供たちの相手をしながら、布団の片付けやおやつの準備などたくさんの仕事がありました。一緒にその仕事をしてみると、それはとても疲れることでもありました。子供たちの相手だけではなく、こんなにいろいろな仕事があるのかと、私はあらためて、この仕事の大変さを実感しました。

そして、私の保育士の三日間はあっという間に終わりました。その三日間で一番印象に残っているのは、ある子が「おねぇちゃん、みてみて」と作った物を見せてくれた時のことです。私が「すごいね」とほめてあげると、その子がとても嬉しそうに笑いました。その時に見た笑顔が最高で、私は、人を喜ばせることはこんなに嬉しいことなんだなと思いました。そして人の役に立つことの大変さと嬉しさも実感しました。

「似合うよ」

私にとって、その言葉は今や宝物です。その言葉によって、「保育士になってたくさんの子供たちを笑顔にする」という夢ができたからです。

中学校の部　佳作

動物への愛情

新宿区立落合中学校　二年
那須　凛

ペット―それは人間達が癒しを求めて、自分の所有物とする動物達のことだ。

私はそのペット達を販売している「ペットショップ」で、一生に一回限りの職場体験をすることになった。

元々動物好きだった私は、行くのがとても楽しみで、気合い充分で職場に出向いた。ただ、私には一つ、どうしても気になることがあった。それはペットを売る立場にあるペットショップの方々が、いずれは売れてしまう動物達とどのような気持ちで接するのか、ということだ。

当日、店に入るとまずエプロンを渡された。なんだかそれだけで店の店員さんになれた気がしてワクワクした。

店の中は、動物特有の臭いがして、慣れるまで鼻がヒクヒクとした。

最初に任された仕事は、小動物の餌やりだった。小動物はハムスターや鳥、うさぎやモルモット、ハリネズミや陸ガメなど、珍しい動物達もたくさんいた。一つ一つ、中を確認していくのだが、餌の種類が多く、あげる量もバラバラなので、すごく難しかった。中でも一番大変だったのは、ヒナの餌やりだった。文鳥のヒナは大きく口を開けてくるので、口の中

に直接餌を流し込む。餌を上手く取ることができず、鳴きながら餌を求めてくるヒナ達を見ると、どうしても焦りが生じてしまい、満足に与えてやることができなかった。

セキセイインコのヒナは手を入れると噛みつかれてしまう程お腹がすいていたので、スプーンを使って餌をあげた。しかし、途中から餌の近くには寄るのだが、何故か一口つついて離れていってしまうようになった。けれども、お腹一杯になったのかと思い、餌を取り出すと、ピーピーと鳴いてまだ餌を求めるので困っていると、お店の方が、「ヒナは冷えたものは食べないんだよ。」とアドバイスを与えてくれた。餌に触れてみると、確かに冷えていた。餌やりには温度調節も必要なんだなぁと、鳴き続けるヒナを見て思った。

餌やりを終えた後も、休むことなく次の仕事に入った。

店掃除は、ほうきで掃いてから、雑巾で床をふいていくというものだが、一日の中で、何回も何回も行った。このペットショップがきれいなのには、こんな陰の苦労があるんだと初めて知った。

金魚の水槽の掃除をしている時に、隣にいた店員さんに、いくつかの質問をさせていただいた。「お仕事にやりがいを感じる時はどういう時ですか。」という私の質問に店員さんは「お客様に〝ありがとう〟と言ってもらった時だね。」という答えをくださった。それは、とても美しい言葉だった。お客様が喜んでくれるのを見ると、嬉しくなる気持ちは、私も同じだった。ペットをほめられると、まるで自分の子供をほめられているような気持ちになったものだ。

そして私が、一番気になっていた質問をした。「ペットに対してどんな気持ちで接しているのですか。」

その答えは、こうだった。

「ペットは早くお客様達のところに行って、本当の愛情を感じて欲しい。ここでは私達も、愛情を注いでいるけれど、それは本物の愛情とは違うからね。」

そして、私に、笑って言った。

「あなたも動物が好きでしょ？　それと同じだよ。」

私は、その言葉で初めて分かった。接し方を考えて接しているのではなく、動物が好きな気持ちのまま接しているのだ。好きな気持ちがあるからこそ、動物が気持ちよく過ごせる環境を作っていこうと、常に考えることができるのだ。このペットショップにいる人は、皆動物が大好きだから、動物達も幸せに見える。

そして、この職場体験で一番印象に残っているのは、ゴールデンレトリバーの子犬達の餌やりである。小さな子犬達の小屋に入って餌を置くと、まるでピラニアのように一気に餌に群がった。驚かされる反面、可愛らしくもある子犬達。抱き上げて匂いを嗅ぐと、赤ちゃんのような安心する温かな香りがした。餌やりは最後の仕事で、とても離れるのが寂しかった。しぶしぶ小屋を出ると、一匹の子犬が檻を越して私に手を伸ばした。軽く握り、「バイバイ」と言った。ずっと見守るように見ていたお母さん犬からも、やんちゃな子犬達からも、そして何より、ペットショップの方々からも、たくさんのことを学んだ。私はそれを「愛」と呼びたい。

初めての職場体験で、体験できたものは意外なことにたくさんの愛だった。愛の入れ物である「心」を大切に育ててい

こう。そんなことが学べた貴重な三日間だった。

笑顔の力

新宿区立落合中学校　二年
松澤花野

私の夢は、保育士になる事だ。

だから今回の三日間の職場体験でも、迷わず「保育園」を希望した。

私が行く事になったのは、新大久保にある保育園で、東京でただ一つの「二十四時間体制」の保育園だ。

二十四時間体制と聞くと、子ども達は夜もずっと寝ていないのか?、というイメージがわく人もいるかもしれない。私もそう思った内の一人だ。

しかしこの保育園の子ども達はちがう。

きちんと夜ご飯を食べ、お風呂に入り、九時には就寝するのだ。

このように、家庭的な形態をとっている保育園。それがこの保育園だった。

園長先生は、「この保育園を作るために、夫と私の全財産を使った。」と語ってくれた。

いくらかわいい子どもでも、はっきり区別してしまえば「他人の子」だ。

私ならそんな決断は、出来ないと思う。

しかし、そう語ってくれた園長先生の目には、少しの後悔もなかった。

その理由が分かりはじめたのは、体験初日からだ。

私の担当は、乳幼児クラスの〝ひよこ組〟。

ひよこ組の子ども達は、言葉で表せないので、一つ一つの表情を読みとることが大切だ。

私も最初はとまどった。

何かしらで泣いているのは分かる、しかし、その「何か」がまったく分からなかったのだ。

「何か」が分からないと、ただオドオドとしてしまう。

そんな自分が、初日はとてもふがいなかった。

そんなオドオドとするばかりの私を、助けてくれたのは、やはりプロの先生だ。

私が対応してもまったく泣きやまなかった子が、先生が少し声をかけたり、あやしたりするだけですぐ泣きやみ、そして笑顔がもどってくるのだ。

その笑顔はすごくキラキラしていて、とてもかわいかった。やはりこの笑顔をなくさない様、この保育園をはじめ、たくさんの保育園、幼稚園が必要だと思う。

そのためには、園長先生のような決断が大きく影響してくるのだろう。

二日目は、私も子ども達を笑顔にさせてあげよう、という思いで一日目以上に頑張って活動した。

一日目は、オドオドするばかりだった私。

それでも二日目は、見よう見マネで子ども達を一生懸命あやした。

一日目はきっと、子ども達も私が不安に思っている事、と

まどっている事を気付いていたのだろう。そのせいで、子ども達も不安やとまどいを感じてしまっていたのだと思う。

二日目は、自分も笑顔で子どもをあやした。

すると、泣いていた子どもが少しずつではあるが笑ってくれたのだ。

とてもうれしい瞬間だった。

そういう所に、仕事に対する「やりがい」を感じる事ができた。

また三日目の終わりには、担当ではなかったクラスの子ども達からも、たくさん「バイバイ」と言ってもらえて、とても素直にうれしかった。

今回の職場体験で、保育士はとても大変な仕事だと分かった。

しかし、大変だとは思ったが、私の夢が変わったわけではない。

それはやはり体力的に厳しいと分かっていても、「人の生命をあずかる」という仕事に、やりがいや誇りを感じているからだろう。

今、職場体験を終えて私が思うのは、「この大切な子ども達の笑顔が消えないように―」という事だ。

最初に思っていた、「なんで他人の子に全財産を―」という考えは、今はもうない。

それは、この体験を通して、子ども達の「笑顔の力」を感じる事ができたからだろう。

これからの人生、この職場体験で学んだ事を活かし、もっとたくさんの「笑顔」を見ていけたらいいと思う。

感　謝

新宿区立落合中学校　二年
和　田　典　子

「仕事」…生計を立てる手段として従事する事柄。私が調べた辞書にはこう記載されていた。たしかに、私もそうだと思っていた。仕事をしなくても普通の生活が送れるなら、仕事をする意味なんてないんじゃないか、と頭のどこかで思っていた。なぜなら、私の両親は共に印刷工場で働いているが、決して楽なようには見えないからだ。しかし、私は今回の職場体験で仕事の大変さについて学ぶことができ、今までとは違う仕事の見かたができるようになり、たくさんのことに気付くことができた。

私は今回、児童館で三日間の職場体験をさせていただいた。幼い頃からの夢で保育士や子どもと接する仕事に就きたいと思っていたので、今回の職場体験先が、児童館に決まった時はとてもうれしかった。それに私も小学生の頃に学童に通っていたので、なんとなく親近感もあった。

私が今回、体験させていただいた仕事は大きく分けて二つある。一つ目は、午前中に行った体験で、今度、この児童館で行われるお祭りの準備だ。二つ目は、午後に小学校から帰って来た児童達とのふれあいだ。どちらも大変だったが、私が特に大変だと感じたのは午前中に行った作業だ。午前中の作

業は、毛糸のボンボンにキーホルダーを付けて形を整える作業だった。最初に説明を聞いた時は、そこまで難しい作業だとは思っていなかったが、これがやってみると意外と難しかった。キーホルダーを付けるまではいいのだが、形を整えるのがなかなか難しい。なんとか二時間作り続けたが、予想していたよりも全然できなかった。担当者の方は、「大丈夫だよ」と言ってくれた。その時、初めて仕事という大変さを知った。今まで大変だと思っていなかった仕事が、ここまで大変だとは知らなかった。そして、私はどの仕事も大変じゃない仕事なんてない、ということに気付くことができた。

そして、私は担当者の方に一つの質問をした。「やっぱり、児童館に通っている子の親は、働いている人が多いですか。」と聞いてみた。それに対して、担当者の方は、「うん、そうだね。やっぱり多いね。」と答えてくれた。そこで、私は今回、児童館に子どもを通わせる親の気持ちに注目した。私も両親が働いていたので児童館に通っていたのだから、私を児童館に通わせていた母に、児童館に子どもを通わせる親の気持ちを聞いてみた。母は「まだ一人で留守番ができないから児童館に通わせると、とても安心して仕事ができるよ。」と答えてくれた。そして、私はどの仕事も関わり合っていて、どの仕事も一つ一つ意味があるということに気付くことができた。例えば、私の日常に欠かせないスーパー、そのスーパーだって販売するものを運んでくれる運搬業者がいなくては困ってしまうし、運搬業者も運搬する物がなくては困ってしまう。このように、いろいろな仕事が密接に関わり合って、私達の生活ができているということを実感できた。

私は、今回の職場体験を通して仕事に対する思いが変わった。今までは、大人の人達が働いているのが当たり前で、特に何かを思った事もあまりなかった。しかし今は、働いていることが当たり前ではないと思うようになった。そして私は、三日間の職場体験で働いている人達に『感謝』したいという気持ちになった。今までの私にとっての『感謝』は自分の身近な人ばかりだった。しかし、今は働いている人達みんなに『感謝』したいと思っている。しかし、私には今すぐその『感謝』を行動にすることは難しい。だから私は、何年後かにきっと社会に出て働くことになるだろう。その時に、今働いている人やその時に働いている人達に『感謝』をしながら働きたい。そして、私は『感謝』をされるような仕事をしたいと思っている。

そして、長いようで短いようだった三日間の職場体験が終わったその夜、私は両親にたくさんの「ありがとう」を言った。

「ありがとう」の輪

文京区立第八中学校　一年
清　水　蒼空子

私は「小さい子どもの世話には、慣れている」、そう勘違いをしていたかもしれません。実際、ボランティアを体験してみると気が付く事なのかもしれませんが、自分がいかに力不足かという事が分かりました。けれど、保育園の先生たちはこんな私にでも、常に「ありがとう」や「助かります」などの優しい言葉をかけてくださいます。私は先生方に何度、優しい言葉をかけてもらったでしょうか。私は声をかけられるたびに「こんな自分でも、こんなに人助けができるんだぁ～」と感じ、とても嬉しくなっちゃいました。「ありがとう」といわれて「こちらこそ、こんな体験をさせてくれてありがとう」って言いたくなりました。まさにボランティアは「ありがとうの輪」だと思いました。

こんな体験をしたおかげで心に残るエピソードがいっぱいできました。私は五、六歳児と一歳児の担当でした。五、六歳児のクラス（空組）では「遊んで、遊んで」と言われ、右手ではお絵書きをして、左手ではオセロをしていました。私はこの時、初めて「自分はこんなに器用だったんだ～」と驚きました。小さい子達といっしょにいると、いろんなことに気が付きます。小さい子達は、目をとてもキラキラさせて、一生懸命話してくれます。そういった子達は、とってもカワイイし、今どきの小さい子は私が小さかった時よりも、すごく物知りでした。一緒に話していると、私が知らないような事まで知っていて、圧倒されてしまいました。

一歳児のクラス（虹組）では、なかなか泣き止まない赤ちゃんがいて、ずっとだっこしていても泣き止んでくれません。先生から「赤ちゃんおんぶしてみる？」と聞かれ、やってみることにしました。やはり、私もそうですが、赤ちゃんは、おんぶされると落ち着くらしく、すぐ静かになりました。あんなに泣いていたのに、私の背中で安心して泣き止んでくれた。そう、私はお母さんの代わりになることができたのです。しかし、次の瞬間、背中をかまれてしまいました。もう、その時は、すっごく痛かったです。けれど、赤ちゃんをおんぶするなんて、そうそう無い、超貴重な体験です。今思えば、背中をかまれてよかったです。

そして、今は自分が変われたような気がします。私はこう見えても、何事にも不安を感じて行動できないところがありました。けれど、今は不安を感じても行動できます。そして何事にも、強行突破できるような気がします。「子ども達の中に飛び込んでいったように、深く考えすぎず、まずは行動に移した方がいい」と、私は気が付きました。

また、ボランティアが社会で必要とされている理由も分かりました。五、六歳の子どもは着替えなどを大体、自分でやることができます。しかし、一歳の子達になると、色々なところで目が離せません。なので、先生が三人ではとても、足りないのです。しかし、先生の数を増やそうとしても、払うお金も無いし、「保育士になりたい」という人も少ないのです。こういった場所でこそ、ボランティアは必要とされているの

ではないでしょうか。お金なんかもらえなくても、心から子どもが好きであれば、嫌な顔一つせずやっていけるはずです。

私は将来、そういった心優しい、大きな人になりたいです。そして、立派な保育士に絶対なってみせます。

ありがとう

文京区立第八中学校　一年
古　川　小百合

私は都合でみんなより遅くボランティア体験をしました。だから、体験をする前に友達から感想を聞くことができました。でも、先生が怖かったとか、怒られたとか、なかなか良い感想は得られません。私の心の中は不安でいっぱいになりました。しかし、実際行ってみると先生達は優しく、打ち合わせが始まってすぐに不安は少なくなりました。

そして本番当日。最初は、なかなか子ども達と打ち解けられません。でも、後半は手をつないで歩くなど、少し距離を縮めることが出来ました。私は元々小さい子が苦手でした。ボランティアなんて…と思っていたのです。あまり人に奉仕するという活動に慣れていない私にとって、ボランティア体験は正直、喜べるものではありませんでした。

でも、今の私は違います。二日目に保育園から帰る時にこんな言葉を頂いたのです。「ありがとう！　またおいで」と。私は小さい頃からわがままで、人を困らせてばかりで、あまり「ありがとう」と言われた事がありません。だからなのでしょうか…。「ありがとう」という言葉に妙に反応してしまって、そしてこう思ったのです。ボランティアは素晴らしいものだと言ってくれた園長先生は、それほど意味なんてなく言ったのかもしれません。でも、私にとってその言葉は物凄く響くものでした。ありがとう、ありがとう…。この言葉を頭の中で何回も響かせながら帰ったことをしっかり覚えています。この時、私は「また来たいな」って思えました。

皆さんだって「ありがとう」と言われたら嫌な気はしませんよね？　人から感謝の言葉を貰うのは、お金を貰うより、ゲームを買って貰うより、きっと素晴らしい事です！。もちろんお金を貰ったりするのは嬉しい事。でもそれは表面上の喜び。本当に人が喜ぶのは、人に感謝された時だと思います。今まで小学校でも、「ボランティアは何なのか」と、時々学んできました。「嬉しい」、「楽しい」、だからボランティアを続けられるのだ、と教科書に書いてありました。はっきり言うと、変な文章だなぁと思いました。そんなに人に奉仕するのが楽しいのだろうか、と。でも、保育園でボランティアしている時、時折こっちに向けてくれる眩しいほど無邪気な笑顔を見て、私は嬉しくなりました。なんだか、その子の幸せを分けてもらった様な気がしたのです。

風の会の皆さんだってそうだと思います。カンボジアの子ども達の見せてくれる可愛らしい笑顔が、ボランティアを続ける原動力になっていると思うのです。きっと、子ども達とふれあう機会なんか、大人になって自分の子どもを育てる時までないでしょう。特に私は一人っ子なので、その可能性はさらに低いと思います。この体験は、本当に私を成長させて

くれました。できることなら、もう一度この体験をしたいです。今年の夏休みは素晴らしいものでした。今の私なら、「ボランティア活動をしますか」、と先生に唐突に言われても、自然と笑みがこぼれることでしょう。

「言葉」「交流」「温かさ」

文京区立第八中学校　二年
池　亀　桃　子

私の将来の夢は「子どもと関わることのできる仕事に就くこと」です。これは、私が単純に小さな子が好きだからというのと、小さい子の笑顔を見た時の幸福感や、小さいながら一生懸命に何かに取り組んでいる時の姿が好きだから、という二つの理由があります。

そして、私には一つの大きな目標があります。「人とたくさん交流すること」これは一生の目標です。小さい時から近所のおじさんやおばさんと会話をしたり、一人でペラペラと話していたり、とにかく話すことが大好きだったそうです。今でも年齢は関係なくたくさんの人と会話しています。下町だからこそかもしれません。私はたくさんの人と言葉を交わし、いろいろなことを吸収したいのです。

私が今回職業体験をさせていただいたのは、小さい頃からよく知っている甘味屋さんです。私は「よく知っているお店だからこそ頑張ろう」と思いました。そのお店はこの地域ではとても有名なお店で、観光客の方もよく来店します。特に夏場は暑いので、多くのお客さんが来店します。

私が少し仕事に慣れてきた頃、あるお客さんの言葉が耳に入りました。

「このアイスおいしい」

よく知っている味なので、おいしいということは知っていました。しかし、なぜか「おいしい」というフレーズがとても耳に残るのです。顔も見ていたお客さんなら「おいしい」と言った時のお客さんの楽しそうな顔も、強く目に焼き付くのです。そして私は心が温かくなり、嬉しくなりました。

私は気付いたのです。どうして「おいしい」というフレーズが、この時は耳に残ったのか。それは、自分が売る側だからです。食べる側の気持ちを考えると、「味はどうだろう」という不安があり、一口食べると幸せそうな笑顔があふれます。売る側の気持ちはどうでしょう。「お客さんのお口に合うかな」という不安がお客さんの笑顔や「おいしい」という一言で解消されるのです。

私は食べる側でなく、売る側の気持ちを知ることが出来ました。それは食べた時の喜びや幸福感にはかなわない、とても大きな喜びと感謝の入り交じった気持ちです。今まで知らなかった気持ちを知ることができて、とても嬉しくなりました。

あるお客さんが言いました。

「今日はとても暑いね。」

すると、お店の方は、

「そうですね。三十二度らしいですね。」

と答え、そうしてその後も話は続きました。私は知らず知

らずのうちに笑顔になっていました。私の住む地域はとても温かい地域なので、そのような会話はごく普通なのですが、私はそれを改めて実感しました。知り合いでも見知らぬ人でも、話し掛ければ答えが返ってきます。私は人の会話を聞いて「温かい」と思ったのは初めてだったので、不思議な気持ちでした。しかし、嬉しくもありました。

私は、今回の職場体験をするまで、売る側の気持ちを知る気も無ければ、売る側に特別な気持ちがあるとも思っていませんでした。しかし、売る側になってみると、書き表せないくらいたくさんの感情があふれます。そして、接客という仕事だから、いつもならばきっと小さなことだと思うことの、一つ一つが大きなことなのです。一つ一つが幸せなことだったり、とても反省すべきことだったりするのです。接客、物を売るということは奥深いことです。今回の体験で本当に嬉しかったことは、交流はとてもすごいものだと感じられたことです。一言でも言葉を交わすだけで楽しくなったり、落ち着いたり、不安になったり、悲しくなったり、そして嬉しくなったり。交流は素晴らしいです。言葉だけでなく、共に何か行動したら、もっともっと素晴らしい何かを得ることが出来るかもしれないと思いました。今までは身近な人との交流は交流としてしかとらえていなかったのかもしれません。これからは身近な人だからこそ感じることも探ってみたいと思います。

私はこの地域が大好きです。そして、私は人との交流が大好きです。なぜなら、二つとも、とても温かいものだからです。今回の体験で改めて感じたこの温かさを胸に抱き、私は将来の夢に向かって歩きはじめます。

包むもの・包まれるもの

文京区立第八中学校　二年
本　松　倫太郎

団子は色んな物に包まれている。餡にみたらし、生醤油。この広い世の中、探せばもっと色んな物に包まれているのだと思う。でも、僕の認識として団子を包んでいるものは「食べられる物」であり、団子をおいしくするための物、というものだった。

僕が職場体験でお世話になったのは、百八十年以上も続く老舗中の老舗。豊富なメニューやたくさんの団子の種類がある。そんなイメージがあった。実際には漉し餡の餡団子と生醤油の焼団子の二種類。メニューも煎茶セットと抹茶セットのみ。それぞれには焼団子と餡団子が一本ずつ。僕は自分の想像と違いすぎて、「たったこれだけ？」と驚いてしまったのをよく覚えている。

そして、もう一つ驚いたのは店の風貌と盛観さだ。江戸の面影を残す店の外観を、初めて目の当たりにして「いかにも老舗の団子屋さんって感じだね」と、クラスメイトとそんな会話をしたのを覚えている。そして店にどっちが先に入るかで開幕した二人だけのジャンケン大会を経て、店内に足を踏み入れた。まず目に入ったのが広く、風情を感じさせる庭園。流れる滝、灯る橙色の明り、庭を埋め尽くさんばかりの竹。

とにかく美しいその光景に僕は感動していた。
　そんなふうに庭を眺めていたら、右にあるカウンターと厨房から「いらっしゃいませ」と聞こえてきた。いよいよ始まる職場体験、感謝を込めて言った。「宜しくお願いします。」
　お店の白衣を着て、帽子を被り、手を洗い、準備万端で厨房に入った。僕達の仕事は皿洗い、注文の受け取り、メニューの用意、片づけ、雑務全般。職場体験なのに結構充実した内容の仕事をさせていただいた。
　目標は「迷惑をかけない・邪魔にならない・初日の緊張を忘れない」の三つ。やるからには迷惑をかけたくないし、邪魔にもなりたくない。慣れるのはもちろん良いことだけど、人を腐らせる悪いことでもあると思うから、初日の心意気を忘れずにするというのが理由。
　僕は団子を包むのは食べ物だけと思っていた。でもそれは全然違った。食べ物以外にも団子は包まれているのだ、とこの体験で知った。
　百八十年以上も経営しているこの店では、団子は古くからの味、文化、そして伝統というものに包まれていた。そしてお客様。割と高齢のお客様が多くて、二人か三人で来店して、団子を食べながら会話に花を咲かす。それがその方々の昔からのスタイルなのだと思った。そんな方々が毎日必ず、代わる代わる店に来る。それもまたこのお店のスタイルなのだと思った。豊かな文化、確かな伝統、そして温かいお客様に包まれて、このお店は残って来たのだと僕は思った。
　そしてここで働く人の存在はなによりも大切であると思った。奥で一日何百本もの団子を作り続けている人、内職のような仕事もし、接客から皿洗いまでする人がここにはいる。その仕事は尽きることが無いほどたくさんあって、みんないつも動きまわっている。そんな人達を見ていて「この人達がこのお店を支えているのか」と感動した。そして、そんな所で職場体験をするというのは、落ちついて考えると驚くべきことで、迷惑だろうなという気持ちが浮かんだ。
　でも、職員の方々は僕たちを笑って受け入れてくれた。なんでも一から教えてくれた。仕事が終わると「ありがとうね」と言ってくれた。何気無く言われたその言葉は、とっても嬉しい言葉で、来て良かったなあと心からそう思った。
ここでの三日間は、いつもお客様や職員の方々に見守られていた。優しく、時には厳しく。まるで羽二重団子のように僕らも包まれている、そんな感じだった。
　この三日間はとにかく楽しかった。同時に仕事は疲れるものだけど、楽しいものなのだと知った。終わった時の達成感はとても心地の良いものだと知った。なにより「ありがとう」と言われることがとても喜ばしいことなのだと知った。
　一瞬のようだった三日間。でも三日間とは思えないほど、内容が濃かった三日間。色んなことを知り、教えてもらい、社会も少し体験した。そんな経験がこの先どんな形で僕の生活に関わってくるのか、はっきりとは分からないけれど、とにかくこれは大切な事なのだということは分かる。そしてそれを活かすも活かさないも自分次第というのも今は分かる。だからこそ僕は、ここでの経験を、この先どんな形にでも活かしたいと思う。それがお世話になったお店への僕ができる精一杯の恩返しであり、礼儀だと思うから。

私の職業観

墨田区立両国中学校　二年
鈴木　ひと美

「料理の本はどこですか。」
少し困ったような表情でおばさんが私のところに近づいてきました。職場体験を始めて二日目の私は、まだ分からない事が多く、不安もいっぱいありましたが、お客さんのためにと思い、心をこめて案内しました。
「どうもありがとうね。」
お客さんのその一言が、いつまでも私の心に残りました。お客さんの役に立てたことがうれしく、またなによりもうれしかったのは、経験が浅い私を店員として見てくれて、聞いてくれたことでした。
私達両国中学校では、毎年二年生が総合的な学習の時間を使って職場体験学習を行っています。体験場所を決めるとき、私は初め保育園を希望しました。なぜなら、小さい子が好きだからです。しかし、人数の関係などから、私は本屋で職場体験をすることになりました。
私が思っていた本屋の仕事の印象は、あまり動かず、レジでお客さんと接客するようなわりと楽な仕事だと思っていました。だから、本屋に行くことが決まってからは、特にお客さんを相手にする仕事なので、明るいあいさつやていねいな言葉遣いを心がけようと思いました。
ところが、実際に行った本屋の仕事は、私が思っていたものとはまったくちがうものでした。例えば、ふつうに棚に並べられているように見える本も、お客さんが手に取りやすいような工夫がたくさんあったのです。
まず一つ目は本が階段のように並べられているということです。この工夫で、お客さんの方から見て本はとても見やすくなります。
二つ目はＰＯＰカードです。ＰＯＰカードとは、お店でおすすめの本や今注目されている本などを紹介しているカードです。このカードにより、お客さんは今話題の本を知ることができ、いろいろな本に興味を持つことができます。私はこのカードを店員さんが作っているということを、この職場体験で初めて知り、おどろきました。
三つ目は、文庫本の中でもホラー系やファンタジー系など種類ごとに分類されているということです。ホラー系が読みたい場合、まとまって置いてあるので、そこに行けば一目でたくさんの本の中から選ぶことができます。この他にも、季節に合った本や課題図書のコーナーが設けられていました。これらはすべてお客さんの立場になって店員さんが考えた工夫です。
店員さんの接客の態度で見ならいたいと思ったことは、いつも笑顔で明るい接客と、手ぎわの良いレジや包装の仕方です。店員さんは、慣れた手つきでてきぱきとレジの仕事をし、お客さんを待たせることはほとんどありませんでした。これは毎日の努力の積み重ねだと感じました。私は慣れていないので、本の包装に時間がかかってしまったりし、お客さんを待たせてしまうと、申しわけないなという気持ちでいっぱい

になりました。

私が一番つらいと感じたことは、ずっと立ちっぱなしだということです。私は店員さんの半分の時間しか働いていないけど、仕事が終わったときは、もう歩くのがやっとなくらい足が痛くなりました。だから、毎日約十時間働いている店員さんはすごいと思いました。でも、なぜこんなにつらいことがあるのに、やめないで続けていけるのかなと思いました。店員さんを見ていると、お客さんがお礼を言ったり、うれしそうな顔をしていたりすると、私がうれしいと思ったように店員さんもうれしそうにしていたので、それが続けている理由かなと思いました。

私がこの職場体験で学んだことは、働くことの意味と身近な労働者である両親への感謝の気持ちです。働くということは、とても大変なことで、途中でやめたいなと思うこともあるけれど、それ以上に仕事を通じて初めて感じる喜びや、やりがいがあるということを身をもって体験することができました。

私の一番身近な労働者は両親です。今までは働いていて当たり前だと思っていましたが、仕事の大変さを知った今、改めて両親に感謝の気持ちがもてました。

私も将来、仕事につくと思いますが、自分の趣味や特技にあった仕事をしたいです。そして、今回学んだ仕事の喜びを忘れずに、人の役に立てるよう努力していきたいです。

職人魂

品川区立小中一貫校日野学園　七年
小金　真沙一

ぼくの父は自営業です。父は、住んでいるところの一階下にある工場で、板金塗装業を祖父と営んでいます。

ぼくは小さいころから、父と祖父の働く姿を見てきました。鉄粉まみれの父はぼくのあこがれでした。

ぼくが小学校に入学すると、父の仕事を手伝わされるようになりました。生まれて初めて手伝った仕事は、小さな鉄板の穴あけ作業でした。とてつもなく大きな機械を使って五十個も百個も穴をあけていくのです。ちっとも楽しくありません。労力の無駄だと思いました。

そんな考えのぼくに、父はこう聞いてきました。

「この製品をつくって、いくら利益が出ると思う?」と。

父が指したのは、ぼくより大きい鉄の箱。

ぼくは、

「十万円くらいかな。」

と答えました。すると父は笑いながら、でも真剣なまなざしでこう言いました。

「そんなにしないよ。二万円ぐらいかな。」

ぼくは驚きました。そして、父たちの仕事のやりくりの大変さも、痛いほど分かりました。

その夜、いろいろ考えてみました。父は、大変な中、どれだけ良くしてくれているか。ぼく達のおこづかいや外食、学

校の教材費、欲しかった新しいGパン代、それから……。
それからぼくは、手伝いがいやではなくなりました。むしろ、もっと手伝いたいと思うようになりました。
そんなある日、「自分の尊敬する人」という題の作文が宿題に出ました。ぼくは迷わずこう書きました。
「ぼくの尊敬する人は、父です。なぜなら、毎日毎日同じ工場に通い、これでもかというほど働くからです。ぼくも、そんな職人になりたいです。」
実を言うと、父と同じ職業に就きたいわけではないのです。ぼくは、自動車の仕事に就きたいと思っていました。
父は板金塗装業の職人なら、自動車業界にも職人はいる。まったく別の仕事だけれど、「毎日毎日同じ工場に通い、これでもかというぐらい働く」ところは一緒なのです。
つまり、みんな同じ「職人魂」を持っているのです。職人と呼ばれる人たちは、みんなこうなのです。
ぼくは、父に、職人にあこがれたのです。
しかし、ぼくも職人になれるだろうか。「職人魂」は、ぼくにもあるだろうか。とても不安でした。
ぼくは、学校でも面倒なことはすぐほうり投げる癖があります。直そうと思ってもなかなか直せないものです。
父にも言われました。
「おまえは面倒臭がりだ」と。
ぼくは、「職人魂」を受け継がなかったみたいです。しかし、作ることはできます。「職人魂」をつくることを目標に、ぼくは生きていこうと思います。

私が大人の人から学んだこと

大田区立馬込中学校　三年
河野　春花

私がこの職場体験で学んだこと、それはどこのお店の店員さんでも、お客さんをとても大事にしているということです。
私が体験をさせてもらいに行った職場は、花屋さんと電化製品屋さんです。この二つのお店は売っている物も、お店の大きさも、働いている人も違います。でも、お客さんに対しての態度や気持ちは、花屋の店長さんも、電化製品屋の店員さん達もほとんど一緒でした。どこが一緒かというと、まず、お客さんがお店に来たら
「いらっしゃいませ。」
と言う。ということはもうあたり前で、お客さんが商品を買って帰る時、そして、そのお客さんがたとえ商品を買っていなくても、
「ありがとうございます。」
と感謝の言葉を言う。これらのことは、普段私が買い物をした時に言ってもらっていたことでした。小さな買い物をしただけでも
「ありがとうございます。」
と年下の私に、しかも敬語で言うという事は、よく考えてみたらすごいことだな、と私は思いました。
つねにお客さんのために働いている電化製品屋の店員さんや、花屋の店長さん達を私はかっこいいと思いました。お客

さんの前では笑顔で、大変だという素振りもしないでいて、それでお客さんのためにかげで必死になっているところは、本当にお客さんのことを大事にしているんだなと伝わってきました。

もう一つ、私には学ばせてもらえたことがあります。それは、私達中学生のようなまだ成長の途中である者には、絶対に働くということを完璧にはこなせない、ということです。なぜなら、私達はまだ自分のことで手がいっぱいだからです。自分のことといっても、お風呂に入る、勉強をする、友達関係や恋のことで悩んだりと、それだけのことと思われるかもしれないけれど、私達中学生はそのそれだけのことで、手がいっぱいになります。両親や、世話をしてくれる人がいなければ、私達はまだ、一人では生きていけないのです。

それに比べ、大人の人達は他に気をかけることができる程、行動や気持ちに余裕がありました。私が職場体験の現場で、やるべきことが分からなくなってしまったり、失敗をしてしまっても、それらは全てその場にいた電化製品屋の店員さんや花屋の店長さんがカバーやフォローをしてくれました。今の私には出来ない事だろうなと思いました。

働くうえでやってはいけないこと、やるべきことの区別が本当に働いたことのない私には分かりませんでした。でも、職場の人達には迷惑をかけたくなかったので、私なりに積極的になってがんばりました。それでもやっぱり迷惑をかけてしまいました。けれど、職場の人達はそれを怒るということはしませんでした。それは私達が、未熟で学ぶべきことがたくさんあるからだと思いました。どんなに大人ぶっても、経験には勝てないのだと知りました。

私が職場体験で大人の人達から学んだことは、他にもたくさんあります。それはささいなことだったかもしれないけれど、私にとってはすごいなと思ったりもしました。

たとえば、その場の状況に合わせて行動したり、本当にどんな時でもお客さんに対してはつねに笑顔であったり、誰も気付かないような小さなゴミをすぐに見つけたりと、働くということはこういうことなんだと思いました。

この職場体験で私が学んだことは、私がこれから生きていく中で大切なことだと思いました。誠意をもって働けば、その気持ちはお客さんの心に届くのだと実感しました。

今回の職場体験の経験を無駄にならないようにしなければならないと思いました。この先、私が働くようになったとき、この事を思い出して一生懸命がんばりたいと思います。私にとって職場体験は多くのことを学ばせてくれました。

私は色々なことを教えてくれた職場の人達や、大人の人達に感謝します。

一番大切なこと

大田区立馬込中学校　三年
鈴木　ナオミアイリス

私は、初めての人と話したりする事が苦手です。なので、このような体験学習には、あまりのり気ではありませんでした。でも、今回「職場体験学習」を経験し、人とのふれ合い

やお話の楽しさ、大切さをあらためて、感じることができました。

私が行った場所は、メディカルデイサービスセンターです。ここで、私はお年寄りの方々と三日間過ごし、とても良い経験をさせてもらいました。

職場体験初日、私はたくさんの不安で一杯でした。私はグループの班長だったので、仕事の責任はとれるのだろうかと、ずっと心配していました。ですが、いざ行ってみると職場の方々は、皆やさしくしてくれたので「ホッ」としました。

職場に行って最初にすることは、おじいちゃん・おばあちゃん達のお出迎えです。職場で働いている方が、お年寄りの方々の家へ車でお迎えに行き、センターまで連れて来てくれます。私達は、職場に着いたお年寄りの方の腕をとり、部屋まで連れて行ってあげたり、お年寄りの方の荷物をロッカーにしまってあげたりと、さまざまな仕事がありました。ですが、初日はおどおどしてスムーズな行動がとれず、職場の方に注意を受け、アドバイスをもらいました。その言葉を聞き、私は頑張ろうと思うことができました。

利用者の方々が全員そろったら、朝の会をやります。その後は、みんなで体操を行いました。私達もおじいちゃん・おばあちゃん達に交じり、一緒に体操をしました。お年寄りの方の中にも、とても元気ではきはきと体操をやる方もいれば、腕がなかなか上がらない方もいました。体操はだいだい一時間くらい行いました。体操が終わったら、昼食。

食事の時間が一番大変な仕事でした。お弁当をお年寄りの方々のテーブルに持って行きます。ですが、お弁当は、それぞれのお年寄りの方にあったものを配膳します。名前とお弁当を確認しなくてはいけないのでとても大変でした。飲みものでも、ちょっとトロミをつけてあげないと、飲めない方もいるので間違えないようにするのに、とても緊張しました。

お昼が終わったら、レクリエーションなどをして遊びます。私が行った時は、一日目は手品。二日目はボーリング。三日目はカルタ大会などをして遊びました。お年寄りの方々はみんな元気なので、ゲームはとても盛り上がる事ができました。次はおやつ。プリンやケーキ、おせんべいなど、おじいちゃん・おばあちゃん達に配ってあげます。私達も職場の方からおやつをもらえたので、お年寄りの方々と一緒に食べました。いつもよりおいしく感じました。おやつの時間が終ったら、自由時間。三日間、同じスケジュールなので、三日目は大体のコツをつかみ、仕事にもなれ、スムーズに行動することができました。

この仕事を体験し、大変だなと思った事は、「お年寄りの方々とのコミュニケーション」です。私にとって、ひいおじいちゃんやおばあちゃん達くらい、年が離れている方々と、どんな話しをしていいのか、どんなことをしていいのか、とても苦労しました。自分のおじいちゃん・おばあちゃんなら、色々と話すことができますが、あまり知らないおじいちゃん・おばあちゃんの前に行くと、まったく話すことの出来ない自分がいました。ただ座っているだけだったので、職場の方に注意をされました。その時、「どんな話でも、大丈夫よ。」と言われたので、自分なりに話を考えて、「今日は寒いですね。」と言ったりしましたが、なかなか話は続きませんでした。

でも、お年寄りの方々は皆、元気でやさしくて、いい人なので、私に気をつかってくださり、色々と声をかけてきてくれました。そのおかげで、私もみなさんと楽しく会話をすることができました。また、お話をしたことによって、お年寄りの方々とも仲良くなることが出来、一緒に折り紙を折ったり、パズルをしたりして遊びました。とても、楽しく仕事をする事ができました。

今回、この仕事を体験し、「人との交流」・「言葉の大切さ」をしみじみと感じることができました。また、失敗して注意されることによって、さまざまな事を学習することができました。コミュニケーションをとり、会話をするだけで、人と仲良くなれるということも分かりました。今回の職場体験学習で学んだことを、学校生活、家庭などでも使えるようにしたいと思います。

人を助ける事はとても大切な事。今回、一番強く感じることができました。

園児たちから学んだこと

大田区立馬込中学校　三年
豊　田　眞　己

「一緒に遊ぼう」

という一言は、私にとってとても嬉しい一言でした。

私は職場体験で、〇〇幼稚園に行きました。子どもは好きだけれど、どのように接すればいいのか分からず、小さい子のお世話は苦手だったことが幼稚園を選んだ一番の理由です。

初日から、困ったことがたくさんありました。

例えば、園児と二人きりになってしまったときです。しかも、それが初めて担当の教室に入ったときのことで、どうすればいいのか分かりませんでした。とりあえず名前を覚えてもらおうと自己紹介をしてみたら、その子は積極的に話しかけてくれたので、すぐに仲良くなれました。私の方がずっと年上なのに、園児に助けられました。

初めは、とても不安だったはずなのに、いつの間にかそんな不安はなくなっていました。それどころか、私自身が園児たちと過ごす時間を楽しんでいました。私が心から楽しいと思えたのは、何よりも園児たちのおかげです。

自由時間のときは、みんなが

「一緒に遊ぼう」

と、言ってくれて、たくさん遊びました。また、お弁当の時間には、

「こっちで食べよー」

「隣に座って」

と、みんなが誘ってくれました。園児たちの何気ない一言が、私に元気をくれて笑顔にしてくれました。だから私は、職場体験の三日間を心から楽しむことが出来たのだと思います。

そして、私の職場体験は楽しむことだけではありませんでした。三日間の仕事を終えたときには、私は多くのことを自然と学んでいました。

先生方からは、一人一人に気を配り、みんなと平等に接することの大切さを教わりました。たくさんいる園児たち、一

人一人に気を配ることは簡単なことではありませんでした。全員に気を配っているつもりでも、先生が気付いたことに全く気付かなかったことがありました。また、園児たちが帰ったあとにも、先生方にはたくさんの仕事があります。その先生方の陰での仕事を体験することで、幼稚園の先生の苦労を知りました。園児たちが気持ちよく生活できるように掃除をしたり、園児たちが楽しめるような行事の物づくりなどで、とても大変でした。しかし、どの仕事も園児たちのためであり、そのことを思い出すとどんなに大変な仕事も頑張ることが出来ました。こんなに大変な仕事を毎日続けている先生方を見ると、園児たちへの愛情が強く伝わってきました。そんな先生方は、本当に素晴らしい心をもっていると思いました。そして、私にとって尊敬できる存在でした。

私は先生方からだけでなく、園児たちからも多くのことを学びました。

園児たちは、元気で純粋な子ばかりでした。その子たちを見ていると、今の私には何かが足りないのではないかな、と思うことが何度もありました。素直な心、時には友達にも真正面からぶつかっていくこと、私は、そんな大切なことをまだ四、五歳の園児たちから学ばされたような気がします。

園児たちの中には、いじめというものがありませんでした。仲良しが当たり前で、みんながいるから楽しい、というような感じでした。私たち中学生の間には、必ずいじめというものが存在しているように思えます。それは、相手を思いやる心がないからだ、と園児たちを見ていると感じました。私たちは園児たちがもっている、思いやる心を取り戻さなければならないのだと強く思いました。そして、そのとき初めて、いじめの存在が完全に消えるのだと思います。

また、私は園児との触れ合いの中で、言葉の重みについて学びました。

園児の一言で、元気にもなるし、頑張ろうとも思えました。また、私に手紙をくれた子がいて、その手紙には、

「ありがとう」

と書いてありました。まだ、平仮名も書き慣れていないはずなのに、手紙を書いてくれたことがとても嬉しかったです。言葉一つで、たくさんのことが伝わることを実感しました。

普段、学校だけでは経験できないことをこの職場体験で経験でき、本当に良かったと思います。学んだこともたくさんあるので、これからに活かしていき、絶対に無駄にならないようにしていきたいと思います。この三日間は、本当に有意義なものとなりました。

私と園児たちとのつながりは三日間だけでなく、私の中ではこれからもあり続けるものだと思います。そして、辛いときには、私の大きな支えとなるものであり、かけがえのない大切なものとなりました。

この三日間は、学んだことを忘れずに、園児たちのような心をもって、これからも頑張ろうと思わせてくれるような三日間でした。

仕事を通して学んだこと

大田区立馬込中学校　三年
中村朱里

私が三日間体験した職場は、老人ホームでした。

体験する前の私は、老人ホームについて知らない事ばかりでした。どのような仕事をするのか、お年寄りの方たちはどのような生活をしているのかなど、全く分かりませんでした。でも、よく知らない職場だからこそ、たくさん学ぶことがありました。

まず一つめは、仕事の大変さです。私達は一日目に、利用者の方全員に、あいさつを終えることが出来ました。あいさつをして回りました。三十分以上かかって、やっとあいさつをしている時、こんなちょっとした仕事でも、仕事はとても大変だということを知りました。そして、このあいさつを毎日している職場の方は本当にすごいと思いました。また、一人一人にあいさつをするということは、利用者の方の体調を知る方法だということを知り、驚きました。こういう小さな仕事でも、とても大切で、やらなくてはいけないことをここで学びました。

二つめは、コミュニケーションをとることの難しさです。年が離れているため、どのような話をしていいのか分からず、利用者の方とあまり話が出来なかった時がたくさんありました。仕事を体験している時、一番困ったことだったと思います。それでも、一緒に歌を歌ったり、何かを一緒に作ったりするだけで、コミュニケーションをとることが出来ました。そのとき、コミュニケーションをとることというのは、言葉だけではないということを学びました。特に、歌は聞いているだけでも一緒に楽しむことが出来たので、とても良い方法だと思いました。私も、一緒に歌った時はとても楽しかったです。

そして、三日間体験した中で一番驚いたことがありました。それは、いろいろな知識が必要だということです。

二日目に、私たちは、利用者の方達とお話をする機会がありました。その時に話したのが、昔の暮らしや遊び、ことわざなどの話でした。絵を見ながら話していましたが、私はどれもよく分からず、黙ってしまいました。でも、職場の方は私達に、それがどの時代なのか、どのような遊びや道具なのかなど、いろいろと教えてくれました。介護などの知識はもちろん必要ですが、コミュニケーションをとるために、歴史など、その他いろいろな知識が必要だということを、初めて知りました。コミュニケーションをとる、それだけでも大変なことを実感しました。

その他にも、三日間体験して、気付いたことがありました。それは、職場の方たちの努力のすごさです。

老人ホームで私達が出来る仕事は、少ししかありませんでした。その中で、レクリエーションの準備がありました。頭の体操になるように計算問題を作ったり、工作をするときに必要なものを作る、というような仕事でした。特に、工作の準備はなかなか大変でした。けれど、職場の方たちは、他にもやらなければならない仕事がある中で、こういう準備をし

ていると思うと、とても努力されていると思い、驚きました。それに、利用者の方たちのために頑張れるのはすごいことだと思いました。

この三日間で学んだことはたくさんあると思います。仕事の大変さや、いろいろなことを学びましたが、その他に、三日間体験して感じたことがあります。それは、仕事は好きでなければ出来ないということです。朝のあいさつも、レクリエーションの準備も、全て自分のためではなく、利用者の方たちのためにやることです。それに、職場の方たちは、利用者の方の顔や名前などを、当たり前のことですがすべて覚えています。これらのことは、仕事が好きでないと出来ないことだと思います。また、職場の方たちは、いつも楽しそうにしていたような気がしました。

実際に仕事をやってみて、出来ることはあまり無く、役に立てたのか、あまり自信がありませんが、学んだことはたくさんありました。職場体験で学んだことを、これから先に活かせるようにしたいです。

現場に立って初めて知る

大田区立馬込中学校　三年
長　倉　香　菜

私は、職場体験で幼稚園に行き、中学校では学べないような貴重なことをたくさん学ぶことができました。

初めて園児たちと会うとき、私は緊張に押し潰されそうでした。弟や妹がいないため、小さい子とどのように接したらいいのか、どんなことが好きなのかなど、分からないことばかりでとても不安でした。しかし実際に園児たちと会ってみると、やさしい心をもった子ばかりで、私の不安はいつの間にか消えていました。

園児たちと接している中で楽しいこと、嬉しいこと、大変なことなどたくさんありました。その中でも私が一番心に残ったことは、やさしい心をもった子が多かったことです。

今、中学校などでは、相手の悪口を言ったり、仲間外れにしたり、いじめが増えてきている気がします。そして、周りの人もそれを止めるわけではなく、見て見ぬふりをしたりしています。それは、相手の気持ちを考えずに自分だけがよければいいという考え方の人が多いからだと思います。

しかし、園児たちは、みんなで遊んでいるときにクラスに一人でいる子を見つけたら、見て見ぬふりをするのではなく「一緒に遊ぼう」と声をかけてあげたり、自分の片付けが終わったから自分だけ遊びに行くのではなく、他の子の片付けを手伝ってあげたりしていました。自分のことだけでなく、周りのことも考えられる子ばかりで驚きました。中学生ができていないようなことも、この幼稚園の園児たちはほとんどの子が当たり前のようにできていました。

私が中学生として教えてあげられることもたくさんありましたが、私たちが普段の学校生活の中でできていないようなことを当たり前に、さり気なくやっている園児たちから「素直でやさしい心」という大切なものを私は学びました。

園児たちとの楽しい時間はすぐに終わってしまいました。

園児たちが帰ってからの仕事はとても大変でした。掃除や片付け、本の整理、部屋の飾り付けなど、学校では何人かの生徒で協力しながらやっていることも、幼稚園では先生が一人でやっていました。一人で大きい部屋を掃除するのは大変でしたが、終わった後に「とてもキレイにしてくれてありがとう」と言われたときは、やって良かったと思いました。他にも折り紙で箱を作ったりしました。一人で何十個も作るので、手が痛くなったりもしました。しかし、次の日園児たちが私たちの作ったもので楽しそうに遊んでいる姿を見ると、その辛さはいつしか喜びへと変わっていました。幼稚園の先生の仕事は園児の世話という印象が強かったため、園児たちが帰った後、このような大変な仕事をしているとは思いませんでした。私が幼稚園に通っていたときに、毎日部屋がきれいに掃除されていることも、棚の中身が整理されていることも、遊ぶ道具が増えていたり、部屋がかわいくなっていたりすることも、全部当たり前のように思いながら過ごしていました。しかしそれは毎日園児が帰った後、先生方がやっていてくれたことなのだ、と。この時初めて知り、感謝の気持ちでいっぱいになりました。私たちが経験したこと以上に大変な仕事も、毎日当たり前のようにこなしている先生方は本当にすごいと思いました。

また、幼稚園の先生は小さい子が好きなだけではできないような気がしました。最後の日に一人の先生が「幼稚園の先生は、園児たちと遊んでいるだけで楽な仕事と思われやすいの。でも、やってみるととても大変なのよね。」と言っていました。私はこのことを聞いて、どんな仕事でも大変なのだと思いました。そして、その仕事の大変さはやっている人にしか分からないと思いました。

私はこの職場体験を通して、大変なこともたくさんありましたが、それと同時にたくさんのことを学ぶことができました。その仕事のありがたみは、実際に自分でその仕事をしてみて初めて分かることだと思いました。そして、どんなに大変な仕事でもやり切った後の達成感は素晴らしいものだと思いました。

職場体験を通して学んだこと

大田区立馬込中学校　三年
脇　萌　実

私は、三日間の職場体験学習で、レストランと和菓子店の二箇所に行きました。

一日目は、イタリアン・レストランに職場体験に行きました。そこで私は、厨房の仕事を手伝いました。主に、サラダ作り、スープの盛りつけ、食器洗いをしました。特にランチタイムは、大勢のお客さんが集中してやってくるので、全てを同時にしなければならず、手を休めるひまもありませんでした。

そんな状態の中で、来店してくださったお客さんに大きな声で、「いらっしゃいませ」「ありがとうございました」との声かけも必要です。私は、奥の厨房で自分の仕事をしながら、お客さんに声かけをしていました。自分では大きな声で挨拶

をしていたつもりだったのですが、時々、お店の方に「もっと大きな声でね」と言われ、自分の手を動かしながら、お客さんへの感じのよい挨拶の声かけに気を配ることの大変さと大切さを学びました。それをテキパキとこなしているお店の方々は本当にすごい、と思いました。

二日目、三日目は、二日間、和菓子店に職場体験に行きました。主に厨房で、和菓子作り、お弁当の盛りつけ、商品の袋詰めを手伝いました。和菓子屋さんでしたが、予約の入っているたくさんのお弁当を作っているのには、びっくりしました。

和菓子作りでは、おだんごの串刺し、みたらしだんごのたれをつけたり、あんこをつけたりしました。あんこやたれは、つけすぎてしまったりつかなかったりと、ちょうどいい感じにつけるのがとても難しかったです。

おまんじゅう作りでは、全てが手作りなので、手が痛くなり大変でした。あんにバランスよくきれいにおまんじゅうの皮をつけなくてはいけなかったので難しかったです。お店の方は、手の感覚でとても早くどんどん作っていて、見ているだけだと簡単そうに見えるのですが、いざ自分でやってみると大変でした。しかし、コツを教えてもらったり、何回もやっていると、二日目にはずいぶんとスムーズにできるようになり、だいぶ形もきれいに作れるようになったので、とてもうれしかったです。

そして、私が驚いたことは、二つのお店とも、ものすごい大きな道具を使っていたことです。普段私たちが家で使っている調理器具などよりも、はるかに大きく、約三倍ぐらいありました。このような調理器具で作るので、調理をする方もたくさん力がいるので大変です。

また、和菓子屋さんもレストランも、朝早くから夜遅くまでずっと立ちっぱなしで働いているので、とても大変なお仕事だなと実感しました。

お店のみなさんはとても優しく接してくれて、少し失敗をしてしまっても、怒らずに教えてくださったのでうれしかったです。また、普段は体験できないいろいろな体験をさせていただいて、大変なこともありましたが、とても楽しかったです。

私は、この職場体験を通して、改めて考えさせられることがこのようにいくつもありました。

そして、特に挨拶の大切さを改めて実感することができました。普段は接客もしていないし、お客さんの立場なので「いらっしゃいませ」と言われたり、「ありがとうございました」と言われるのはあたりまえだと思っていました。しかし、お店で接客をやらせていただいた時に、あたりまえだと思っていた言葉が、お客さんとのコミュニケーションにつながったりする大事なことなのだ、と実感することができました。普段の自分の立場からの目線ではなく、働いている人の立場からの目線で見ると、いつもはあたりまえと思っていることが、実はとても大切なことなのだ、と思えたのでよかったです。

この職場体験で学んだ、挨拶やコミュニケーションの大切さ、相手の立場に立って物事を見るということの大切さは、職場だけのことではなく、さまざまな人と関わっていく日常生活、社会生活の中で生きていくのにとても重要なことだと

思います。

このように、二つの職場に行って、学んだことがたくさんあったので、学んだことを活かして、日々生活していきたいと思います。

先生と子ども達から学んだこと

練馬区立中村中学校　二年
喜　名　早智子

私には保育士になるという夢があります。昔から小さな子と遊ぶことが好きで、友達の家で友達の妹や弟と遊んだりすると、もうその日は「帰りたくないな」なんて思っていました。

中学一年生の冬、職場体験がありました。行き先はすぐに決めることができました。お店などの書いてあるリストのなかに、保育園という文字を見つけるとすぐに丸をつけました。その保育園は五歳までの子どもがいて、小さなところだけどにぎやかで明るいところでした。

体験当日、胸をわくわくさせながら保育園に向かいました。私が担当したクラスは一歳の子のクラスです。寒い日が続いていたせいか、みんな鼻の下に黄色い鼻水を固まらせていました。正直最初は「きたないなぁ」「できれば〝だっこしてぇ〟なんて言わないで」と思いました。しかしいざ本当に「お姉ちゃんだっこして！」と笑顔で駆け寄られると本当に愛らしく、こっちまで笑顔になってしまいました。もう鼻水なんて気にならなくなりました。

絵本を読んでいると、一人の男の子がくしゃみをしました。すると私に向かって

「お姉ちゃん、ごめんなさい。」と泣きそうになって言いました。なんだろうと思い、その子の視線を追うと、私の足がありました。よく見ると、グレーのズボンに黄色いしみができていました。男の子の鼻水です。鼻水と分かった瞬間、硬直してしまい、「やられた！」と思いました。すると男の子は「ごめんね。お姉ちゃん。」と、鼻水をティッシュではなく私のエプロンでふき取りました。そんな失敗もなんだか可愛く思えてきて、思わずだっこしてしまいました。小さな子は本当に純粋で心がきれいで、何だかさっきまでの自分がきたなく思えて、恥かしくなりました。

一歳のクラスがあったのは二階でした。集会などで一階に降りる時も、落ちないように世話をしました。十人程いる子ども達を二、三人の先生で世話をするのはとても大変なことでした。私は一人の相手で精一杯だったのに、先生方は一人で三人程の相手をしていました。

「すごく大変だけど、その大変さが楽しい仕事なんですよ。」先生が笑顔で言っていました。大変さが楽しいなんて、最初は全く理解できませんでした。でも仕事をしていくうちに、どういう意味か分かってきた気がしました。何かを一生懸命やった後は、とてもすがすがしかったです。またそれが〝誰かの為にやったこと〟だと、なおさら何かを得た気がしました。

子ども達がお昼寝をしている間も、仕事はたくさんありま

した。おもちゃを洗ったり、連絡帳を書いたりと、忙しかったです。お昼寝の時間が終わっても、なかなか起きない子がいました。体をゆすったり話しかけたり、なんだかんだで十五分かかりました。起きた時、その子に「おはよう！お姉ちゃん」と笑顔で言われると、思わず私も笑顔になりました。

お別れの時間、部屋を出ようとすると、子ども達が駆け寄ってきました。

「また遊びに来るよ」と言うと、その時に流行っていた「恋におちて」を歌ってくれました。まだ一歳、歌の意味なんて分かっていません。でもどんなに歌が上手い人が歌うよりも、ずっと素敵に聞こえました。

「ありがとう」と言って保育園を出ると、涙が出そうになりました。たった六時間しか一緒にいなかったのに、別れるのがとてもつらかったです。

保育士になるにはまだまだだけど、今回の体験を通して保育士という仕事が本当に好きになりました。私はただ優しくしていただけだったけど、先生方は時には厳しく叱ったりもしていました。しかしその言葉からはその子を想う気持ちがすごく伝わってきて、優しくするだけではいけないということが分かりました。また体験中、先生方は私のことを「先生」と呼びました。少し照れ臭かったけど、うれしかったです。先生方や子ども達から学んだ、大変さが楽しいというのを忘れないよう、これからも頑張っていこうと思います。

夢を現実に

練馬区立北町中学校　三年
根津友美

私の将来の夢は保育士です。年長からの夢で、小学校に上がった年からピアノを習い始めました。その夢は一度も変わらず、中学二年生の職業体験で保育園に行くことにしました。体験先は、私自身が通っていたところですが、七年前に改築されたので顔見知りの先生方も転勤されていました。

保育園では、二日間にわたってお世話をさせてもらい、一日目は三歳児、二日目は一歳児を担当しました。

三歳児はとても賑やかで、よく話し掛けてきてくれました。時には三冊の本を一度に差し出され、読んであげるのが大変でした。一番嬉しかったのは、いつも寝つきが悪いという子を寝かせてあげられたことです。逆に、なついてしまっていつまで経っても寝てくれない子もいました。

「トントンして」

と、呼ばれた時は自分も背中を〝トントン〟させてもらって寝ていた頃を思い出し、とても懐かしく思いました。

皆が寝ている間は、積み木を濡らしたタオルで一つずつ拭く作業をしたりしました。保育士さん達は常に清潔面に気を配っているんだなと実感しました。

一番困ったのは、幼児同士の喧嘩です。何の手加減も知らない子たちですから、噛みついたり、爪で引っかいたりします。時には、危ない物を投げつけてきたりするので、止める

のが大変でした。

一歳児を担当した時は、部屋に入った瞬間三歳児と雰囲気が違いすぎてとまどいを隠せませんでした。まず、まだ言葉を上手く話せないため、部屋がシンとしていたのです。唖然としてしまった私は、幼児に上手く話し掛けられずにいました。すると一人の男の子が私の目をジっと見ている事に気が付いたのです。私はその子の側に寄って頬をさわりました。その子は最初、とても警戒した顔をしていたのですが、ゆっくりと笑顔を見せてくれたのです。きっと私も、触れる前は不安げな顔をしていたのでしょう、自然に笑顔になり、その子はいきなり抱きついてきました。その時、上手く話せなくても触れ合っていく事で何か通じるものがあるのだと思いました。そのあとは、その静かな雰囲気にも慣れ、多くの幼児たちと触れ合うことが出来ました。

そして私はこの日、初めて幼児の〝おむつ交換〟をすることになりました。最初は上手く交換してあげることが出来ず、幼児も違和感を感じていたのか、歩き方がおかしくなってしまいました。

更に、避難訓練という貴重な体験もさせて頂きました。最初に幼児に防災頭巾をかぶせ、その後に一人ずつ靴を履かせてあげます。全員いることを確認したうえで園庭に避難します。私は何も知らなかったのでとても焦りました。特に、靴を履かせることが意外に難しくて時間がかかってしまいました。

この二日間の職業体験によって、保育士になりたいという気持ちが更に強くなりました。体験から一年経った今でも、その出来事は、はっきりと明確に覚えています。

また、トイレには園児が怖がらないように壁にたくさんの動物の絵が描かれていたり、遊び道具である粘土には、誤って口にしてしまっても害の無いように小麦粉が混ぜてあったりと、園児のために様々な工夫が施されていてとても勉強になりました。そして、常に園児を気にかけ、その日の様子や出来事を親に伝え、親ともコミュニケーションをとっていくことも大切な保育士の役目だと実感しました。

今の私の仕事は、勉強する事なので一日一日悔いの無いように過ごし、保育士という夢を現実に変えたいと思います。

物作りのススメ

葛飾区立立石中学校　三年
佐々木　博　弥

「作る」ということは、「楽しい」という人もいれば、「めんどくさい」「買ったほうが早い」という人もいます。僕の場合は前者の方です。作ることが嫌いな人に、作ることは楽しいと教えたいぐらい作ることが好きです。学校の技術の授業で、何か作ると言われた時はとても楽しみです。

「作る」ということは、たし算によく似ていると思います。詳しく言うと、式の項が「作る」ことでいう部品で計算が組み立てで一つにまとめた答えが完成、ということです。僕がこのたし算の楽しみに気付いたのは、おそらく幼稚園年長生ぐらいのときでした。

僕が幼稚園生の時に、お母さんが穴ボコのあいた木の板とプラスチックのネジとナットが入ったおもちゃを買ってきて、「手伝ってあげるからいっしょに作ろう」と言ってきました。そのおもちゃは、船やクレーン車や車を作れるおもちゃでした。でも、僕は部品よりも完成図を見て、「お母さん、これ作って」とお母さんにまかせっきりで寝てしまいました。起きた時には見事なクレーン車ができていました。僕は「これ、どこで買ったの」とお母さんに聞いたら、「作ったの」と言っていました。その時、あの小さな部品からこんなに大きなクレーン車ができるなんてすごいと思いました。次にお母さんはクレーン車をバラバラにして、「今度は車作ってみようか」と僕を誘ってくれました。お母さんが手伝ってくれたから一時間程度でできました。その時作った車と達成感は、今でも色あせることなく脳裏に焼きついています。子どもの頃のことは案外クセになりやすく、今では時計や簡易電光掲示板などを作るようになって、完成しては喜んだりしています。

作ることの最大の魅力は、物に愛が生まれることです。よく分からない人はこう考えてください。「あなたが作ったイスと、それと全く同じような買ったイスとではどちらを大切にしますか」。たぶんあなたは自分で作ったほうのイスを選ぶと思います。それこそが物に対する愛です。自分で作った物には、どんなに出来が悪くてもそこには愛があります。もっとも、ちゃんと気持ちを込めて作ればの話ですが。今学校でもやっているロボット制作も気持ちを込めて作れば、完成した時に、外見が変だろうといびつな動きをしていようが、嘘のように自分のロボットが一番だと思うでしょう。そんなはずはないという人は、一度でいいからたくさんの愛を込めて物を作ってみてください。きっとこの気持ちを理解できるでしょう。

僕個人としては、作る過程も大好きで、小さな部品がだんだん大きくなっていくのがたまらなく好きです。それに、イスを作るときは、僕の場合木材切断だけで少し達成感を感じてしまい、釘を打ち終わった時もそんな感じで、完成した時に大きな達成感を感じてしまうという、ある意味作るのを楽しむのに適した気持ちのもち方をしています。だから僕は物を作るのが大好きなのかもしれません。

最後に一番言いたかったのは、みんなにもっと物作りに挑戦してほしいということです。今まで作るのが得意でもあまり好きにはなれなかった人も、作るのが苦手で嫌いな人も、少し気持ちを変えて、いつもとは違った角度の目線で物を作ってみてください。時間がかかるかもしれませんが、どんどん物作りに挑戦していくうちに突然、「あれ、作るのって、もしかして面白いかも」、と思いはじめる日がきっとくるでしょう。

宝物の日々

江戸川区立二之江中学校　三年
住吉　美穂

「こんにちは」……。楽しそうな可愛い笑い声にかき消されてしまった。もう一度大きな声で「こんにちは！」。一瞬、静かになり、園児たちがこちらを見た。そして、一秒もたた

ないうちに、パァーと、キラキラ輝くような笑顔をみせた。とたんに、緊張していた私の心と、ひきつっていた顔が緩んでしまった。まるで、園児たちに魔法をかけられたみたいだった。次は、私が笑顔になり、落ち着いて自己紹介をすることができた。園児たちを見て、意欲がわいてきた。

私は、中学二年生のときに、チャレンジ・ザ・ドリームという職場体験で△△保育園に行った。この保育園は、私の母校なのだ。このお世話になった場所に恩返しをしたくて希望した。それだけではない。私は小さい子どもが大好きだからだ。そういう思いを胸に△△保育園に行った。

あいさつ等を終え、みんなの笑顔を見て、ほっとしていたのも束の間、ワァーとかけよってきた。そして、園児たちが私の荷物を取り、何をするのかと思っていたら、せっせと一生懸命かつぎ、棚に置いたのだ。「美穂先生のバッグここね。」と、その言葉に感激した。もう名前を覚えてくれたのだ。園児たちの笑顔ですごく嬉しかったのに、こんなに可愛いらしいこともしてくれて、心がとても温かくなった。園児たちは、私にはもっていないような、ものすごいパワーを持っているんだとびっくりしてしまった。

荷物を置いてきてくれた園児たちが、「遊ぼう！」と、言って、私の足に抱きついてきた。彼らと同じ目線になり、一緒に遊んだ。今、思うと、会ってから三十分も経っていないのに、自然に解けこむことができて驚いた。彼らには、誰でも受け入れる、不思議な力を持っているのだと思った。

次は、園庭で遊んだ。スベリ台、フラフープ、ジャングルジム。いろんなことをした。スベリ台では、「それでは発車します」「いってらっしゃい」と、言うと、とても喜んでくれた。本気で遊んだから、楽しかったのだと思う。園児たちと同じ気持ちになることが大切だと思った。

遊びの時間が終わり、お昼ごはん。おいしそうに食べている時間も過ぎ、「全部食べたの？　すごいね」と、言うと、誇らしげな表情をみせた。片づけの時間も終わり、お昼寝の時間だ。ふとんが敷いてあるホールに行き、横になる。私はふとんの間に座って、園児が寝つくまで背中をトントン。「先生トントンして」と、四方八方から言われ、つぎつぎにトントン。園児たちはいつの間にか寝入っていた。もっと一緒に居たいと思いながら、可愛い寝顔の園児たちに「バイバイ」と、小さな声で言ってから、一日の体験が終わる。

あっという間の五日間だったが、充実していた。近くの公園に散歩に行ったり、木の実を紙粘土にちりばめてピザを作ったりした。小さい子との毎日は発見の日々なのだ。こちらの投げかけによって、園児たちの表情が七変化したり、楽しい日々を送ることができた。疲れもあまり感じなかった。むしろ、彼らにパワーをもらって元気になることができた。最後の日に、園児たちが感謝の気持ちを書いた手紙をくれた。園児が喜んでくれたことが、私にとって一番嬉しかった。

そんな思い出をつくってくれた『チャレンジ・ザ・ドリーム』という企画に、私はとても感謝している。社会に出て「人のために働く」、それが喜びや生きがいにつながるという経験が少しでもできたからだ。

△△保育園に実際に通っていた日々と、今回の経験の日々は、私にとってどちらも大切な宝物になった。

感謝の気持ちを忘れずに

江戸川区立二之江中学校　三年
野　中　彩　希

四日間のチャレンジ・ザ・ドリームを通して、薬局で働きました。仕事内容は、「品出し」だと聞かされ、最初は「簡単じゃん」と思っていたけれど、実際はそんなことはなく、とても辛い体力仕事でした。何度も何度も同じ作業の繰返しで、うんざりしていた私の頭の中には「早く帰りたい」この言葉で埋めつくされていました。「お金をもらえないのに何故こんなつまらないことをしなければならないのか」「今やらなくても、将来アルバイトという形で経験するのだから、こんなこと一日体験すればいいものを、一週間近くやらされる意味がまったく分からない」。最初の頃は、そんな疑問と不満を抱きながら、ただただ時間が過ぎるのを心待ちにし、その日その日を過ごしていました。そんな苦痛な時間の中での唯一、至福のときがお昼の時間でした。母が作ってくれたお弁当は、憂うつだった私を一瞬で幸せにしてくれました。何の変哲もないただ普通のお弁当だったけれど、あのときの私には、この世で一番の絶品に思えました。大袈裟な比喩かもしれないけれど、それほど辛い四日間だったのです。

私は帰るなりすぐさま母に愚痴を言いました。そんな私に母は「働いてお金をもらっていることが、どれだけ大変なことか、これで分かったでしょ。」と言いました。母のその言葉に私は深く考えさせられました。私が小学校高学年のときに姉は高校生で、アルバイトを始めました。それに続くように兄も始め、自分たちで稼いだお金でやりたいことを好きなようにやっている姿を見てきた私は、「早く高校生になってアルバイトをしたい」と思っていました。母の言葉を思い出し、「姉たちも、こんな辛いことをしているのか。アルバイトに限らず、働くということは決して楽で簡単なことではないんだ」と思い、身を以って体験した私は、あることに気付きました。

朝から晩まで汗水たらして私なんかより何倍も何倍も大変な仕事をして、疲れて帰ってきているはずの父は、私の前で一度も仕事の「愚痴」、「文句」、「不平不満」を口にしたことなんてなかったことに。そんな父の姿は、どこかの偉人や大統領なんかよりも偉大に見え、誇りに思えました。そして、父のおかげで私はこんなにも幸せに囲まれて暮らしていたことにも気付きました。毎月、母からもらう少ないおこづかいも、おいしいご飯を食べられるのも、洋服や欲しいものを買えるのも、携帯代も、学校に何不自由なく行けるのも、当り前のことにしか思えないけど、でもそれらは全て父の労力の上に成り立っているのだと。これらのことに、今まで深く考えず、気付かず、感謝の気持ちを忘れ、当り前のことだと勘違いし暮らしてきた過去の自分がとても情けなく、親不孝者だと思いました。そして、それ以上のことを望むということは、普通なことなのかもしれないけれど、でもそれは欲張りなことなのではないのかとも思いました。

しかし、「人」という生物は、利己的な考えを持つ自分勝手な生き物だから、その内、親に対する有難みを忘れ、幸せなことに気付かず生きていくのかと思うと、私は人間とは悲し

い生き物に思えてきました。「そんな人間には絶対なりたくない」。だから私は、周りにたくさんの幸せがあることに気付かせてもらったチャレンジ・ザ・ドリームは、とても意味のあることなんだと。貴重な体験をさせてくれたお店の人に感謝し、この気持ちをいつまでも忘れず、親孝行していきたいと思いました。

当時は嫌な思い出だと勘違いしていたけれど、今振り返ってみると、とても素敵な思い出です。

働くということ

江戸川区立二之江中学校　三年
横山　遥花

私は、弟がいるせいか、小さい子が大好きです。幼稚園児の頃、いつも優しく接してくれる幼稚園の先生が大好きで、その職業に憧れていました。

そして、中学二年生の二学期、私はチャレンジ・ザ・ドリームで近所の保育園に行けることになりました。

そして、いよいよチャレンジ・ザ・ドリームが始まりました。私は、二歳児のクラスを担当させていただきました。はじめは、私もとても緊張していて、あまり自分から話しかけられず、保育士の先生に頼まれた仕事だけをこなしていました。一日目は、何人かの名前を覚え、仕事の流れがだいたい分かり、二日目からは、みんなの顔と名前を覚える努力をしました。そして、まだ二歳で、私がその子の言葉を聞きとれなかったり、意味が分からなくても、しゃがんで同じ目線になって目を見て話しを聞いていると、その子の目はとてもイキイキしていて楽しそうでした。私はそれを見て、とても嬉しくなりました。

「目を見て話す」当たり前のようなことですが、目や顔の表情だけでも、伝えたいことがどんなことなのか、すごく伝わってくる気がしました。園児と遊んだり本を読んであげたり、私が幼い頃見ていた、幼稚園の先生になった気分で、とても楽しかったです。

しかし、仕事というのは楽しいことばかりではないことを、今回経験することができました。園児と接する時は、常に低い姿勢なので腰が痛くなったり、全員分のお手ふきタオルを手洗いし、干すという作業が一日に何回もあり、園児がお昼寝をしているときは、庭を掃除したりしました。私はチャレンジ・ザ・ドリームの期間中、毎晩ぐっすりと眠りました。それは、朝から夕方まで仕事を経験して、とても疲れていたからです。

では、なぜ楽しい事だけではない仕事を人は続けられるのでしょうか。私はこう思います。もちろん、生活していくためにお金は必要です。そのお金を得るためにも、働かなければなりません。しかし、そのためだけに働いている人ばかりではないと思います。以前に、働いている人たちにインタビューをしたときに、仕事のやりがいについて聞いた事があります。すると、ある美容師の方は、「お客さんが喜んでくれる顔を見ると、嬉しいし、この仕事で良かったな、と思えるところ」と話して下さいました。私も、園児と接していて、とても楽

しかったし、トイレに一緒に行ってあげたり、絵本を読んであげると、「ありがとう」と言ってくれて、とても嬉しかったです。仕事には大変な部分もある分、やりきったときの達成感や、人の役に立てた、という嬉しい気持ちが倍くらいに思えるのではないかと思います。仕事にはいろいろな種類があります。人と接することの少ない仕事だって、たくさんあると思います。ですが、そういった仕事にも、やりがいはあると思います。みんなそれぞれ、自分に合った仕事を見つけ、頑張って働いているのだと思います。

私の父は、休みの日がとても少ないですが、家族を養うために毎日働いてくれています。母も同じです。仕事であったことなどの話を聞いていると、楽しそうだな、と思う部分も、大変そうだな、と思う部分もあります。社会に出て、仕事も何もしないのは、きっと何だか生きている感じがしなさそうです。

私も将来、自分がやりたい職業を見つけ、その職業に就けたらと思います。チャレンジ・ザ・ドリームで、本当に多くのことを学びました。今回学んだことを活かし、自分も精一杯、人のためや、自分のために働きたいと思いました。

家庭科について

江戸川区立瑞江中学校　三年
仁　平　美沙紀

私は、家庭科がとても好きです。

そのキッカケは、私が小学三年生のときのことでした。まだ幼稚園に通う妹に、母が名札のところにつけるワッペンを作っていました。その時、私は母の作っている姿を見て、「とても楽しそうだなぁ…」と思い、裁縫に興味を持ちました。

それから私は、母から縫い方を教えてもらいました。四角い布を半分に折って縫い、袋にした物をよく作っていました。今思えば、縫い目が粗くて何も入りませんが、母は喜んで受け取ってくれていました。また、ボタンのつけ方や刺しゅうのやり方など、色々教えてもらっていました。

小学五年生になり、小学校の授業で裁縫が始まりました。今まで、少しずつ母に教えてもらっていたので、すんなり出来るようになりました。そのこともあり、授業だけでなく、家庭科クラブにも入り、編み物も学びました。

中学校に入学し、小学校の頃よりも家庭科が好きになった気がします。

なぜかというと、中学校の授業は小学校の頃の授業に比べて本格的になり、先生が自分の体験や知人から聞いた話をよく話してくれるからです。その話はとてもおもしろくて、つい笑ってしまいます。でも、分かりやすく説明してくれるので、楽しく授業を受けることが出来ます。

また、授業で保育実習もしたことがありました。私が担当したクラスは四歳のクラスでした。その保育園には、パズルやブロックなどがありました。たくさんの園児たちとふれあい、「みさきちゃん、パズルやろう」とか「次はコレやろう」と言ってくれたので、園児たちと一緒になって遊んでいました。最初はただ単にパズルやブロックで遊んでいるだけかと思っていました。ですが、遊ぶだけではありませんでした。パズルやブロックがなぜ置かれているのかというと、子どもの手の発達のためだそうです。それを初めて知り、とても驚きました。

私の中学校には実技選択授業というものがあります。私は、一年生の時からずっと家庭科を選択しています。一年生の時は、刺しゅうのキーホルダーを作り、色々な刺しゅうのやり方を教わり、作ることが楽しくて暇があると何かを作っていました。季節が変わり、冬になると編み物をしました。犬用のマフラーを作りました。色々な模様の編み方を知りました。二年生になると、テディーベアを作りました。布・ボタン・リボンなど、全部自分で選んだので、すごく自分らしいものが出来たと思います。三年生になり、自分が着ることが出来る洋服を現在作っています。

物を作り終わると、達成感があります。また、みんなが自分の作品を見てくれるのが嬉しいし、「作って良かった」「今度はこんな風にしたい」など、どんどん表現したい事が広がっていきます。

そして最後に、私の将来の夢は、服飾関係の仕事に就くことです。

なぜその仕事に就きたいのかというと、今私は、他の人がデザインした服を着て生活しています。それはそれで良いけれど、やっぱり自分がデザインした服を着たいと思います。また、自分がデザインした、自分色の服を他の人にも着てもらいたいとも思います。

では、その夢をかなえるためには何をしたら良いでしょうか。私が思ったのは、今の時期を大切にして、色々な事を体験し、色々な事を学ばなければならないと思います。それはもちろん、家庭科の「技術」も必要です。手縫いやミシン、色々な刺しゅうなど本当に基本的な事から身に付けていけば良いと思います。

これから社会に出る上で、他にも大切な事がたくさんあると思います。例えば、基本的な「あいさつ」「言葉遣い」などです。やっぱり仕事をするということは、人とのつながりが大切です。一緒に仕事していく上で人間関係を築いてこそ、達成感、喜びもあると思います。

これからも、自分が上達できるように学んでいきたいと思います。

職場体験で学んだこと

江戸川区立鹿骨中学校　三年
長谷川　椋

小学校時代、近くの老人施設に何度か行ったことを覚えている。一緒に歌を歌ったり、遊んだりした。

小学六年生の夏休みは、保育園の三歳児クラスを担当し、幼な子たちとたくさん遊び、おいしい給食を食べた思い出がある。僕は一人っ子なので、三歳児の子どもたちは、弟や妹のようにかわいかった。

中学生となったばかりのゴールデンウィークに母とガイドヘルパー講習会に参加し、免許を取得した。それは、まだ僕が五歳の時、祖母が失明してしまったので、祖母のガイドがきちんとできるようになるためだ。お陰で自信を持って祖母と二人でコンサートに出かけられるようになり、少し大人になった気分である。

中学二年の時、チャレンジ・ザ・ドリーム（職場体験）で五日間、江戸川区総合体育館に通った。何度も利用したことのある施設だったが、指導員の方々や清掃員の人たちの体験は初めてだったので、なにもかもが新鮮だった。

初日、家からはバスでの通勤だった。前日に雪が降り積もったせいか、バスは予定通りには動いていなかった。こんな日に遠くから出勤する人たちは、いつもより時間がかかって大変なんだろうなと思った。職場では、職員のみなさんがとても元気で明るく、さすがスポーツの職場だなと感じた。

まず最初にやったのは清掃員の方々の手伝いだった。売店のシャッターがすごく汚れていて、そのシャッターを磨くことだった。腕は筋肉痛になったが、なにより洗剤のにおいがきつく、その方がつらかった。清掃員の方々はいつもこんなに大変なことをしているのだなと思った。

二日目はプール監視だった。一緒に体験した友人も泳ぐことが得意だったので、職員の人たちに喜んでもらえた。プールの職員の方々は全員（バイトは除く）、救急救命の資格を持っていた。特に平日は、お年寄りがほとんどだからだ。泳いでいるうちに、急に心臓が止まったり、呼吸が止まったりしてしまう人も過去にいたそうだ。そのため、命を守る仕事なので職員の方々はいつも緊張感を持って行動していた。

三日目、午前中はトレーニングルームの受付をした。ここは幅広い年代の利用者がたくさん来るので、対応の多さに苦労した。お昼近くなり、自分たちも実習を受けていいと言われ、ランニングマシーンで走ったり、筋トレ、ストレッチなど、色々やらせていただいた。午後は体育館の入口で総合受付の予定だったが、前日に東京としてはめずらしい大雪が降り積もり、玄関に自転車が置けない状態だったので、急きょ、清掃員の方々と雪かきをすることになった。短時間だったので一部しかできなかったが、自転車で来る利用者の人たちに「ありがとう」と言われ、嬉しかったことを今でも覚えている。

四日目は、昨日の続きで、全ての雪を取り除くことだった。昨夜は非常に寒かったせいで積もっていた雪が氷となってしまい、くずして運ぶのが重くて大変だった。

最終日、プールの監視を実際にやることになった。一番気を付けなければいけないことは、絶対にプールから目を離してはいけないということだった。この時、プールの監視員は一番大変な仕事だなと改めて感じた。

この五日間、休むことも遅刻もせず、体験できたことは本当によい経験になったと思った。最終日に、

「高校生になったら、アルバイトに来てね。」

と言ってもらいとても嬉しかった。

将来、どんな職業に就くかまだ分からないけれど、今回の体験を通して『人のために働く人』になりたいと思った。

一枚の青い布

江戸川区立篠崎中学校　三年
田　島　有　希

はっぴ作りは、中学二年生になってまもなくから始まった。その時から、被服室には、『はっぴを作って秋田で踊ろう』と書かれたポスターが貼られた。

まず最初に、はっぴの図がかいてある青い画用紙を形通りに切り、はっぴのミニチュアを作った。この作業で、なんとなくはっぴのイメージがわいてきて、早く作りたいと思える様になった。

一枚の青い布が配られると、ウキウキした気持ちの反面、戸惑いもあった。少しは、はっぴの形になっているところから作り始めるのかと思っていたのに、実際にはただの布きれだったからだ。不安に思いながらも布を広げ、作業は始まった。二メートルもある大きな布は被服室の机や床を覆い、足の踏み場がないほどだった。長いものさしを使いながら布にはっぴの形を書き、それに沿って切る場面では特に緊張した。二つ折りになっている布を一緒に切らないように、何回も確認しながら慎重にハサミを入れていった。切り終えると、ハサミと一緒に汗も握っていたことに気付き、安心感と笑みがこぼれた。

次の作業はわきとそでのミシン縫い。布が大きいので、他の部分が重ならないようにと神経を使った。縫うところは見事に全て直線縫いで、日本の着物というのは直線でできていることを改めて感じた。

一番難しかったのは襟の部分だ。別の布を身ごろにかぶせ、長い距離をひたすらまつり縫いして仕上げた。襟は首の所が曲線になっているので見ごろと合わせにくく、失敗しないように指先に集中した。進めていくうちに、少し上達した気がして嬉しかった。また、襟の部分には白糸で名前と学校名を縫いとった。布が紺色だったから、白い糸がひときわ映え、かっこよくも見えた。

さらに、はっぴの背中には刺し子を入れることになり、夏休みに各自オリジナルな図案を考えて刺し子を作ってくることが宿題になった。初めはなかなかいいアイデアが浮かばなかったが、私は「イルカ」の絵と「輝」の文字を刺し子の図案にした。自分としては納得のいく出来栄えで満足した。こうして約半年かけて一枚のはっぴが出来上がったのである。たった一枚のはっぴを作るのに、なんと長い時間がかかった

ことか。私は、衣服のでき方と苦労を初めて知り、今着ている服に感謝した。

そして、三年生になるとはっぴの出番も近づいてくる。アイロンがかけられた姿を見ると、ここまで頑張ってきてよかったなと思った。

『はっぴを作って秋田で踊ろう』

文字通り、このはっぴは修学旅行用の大きなバッグの中へ。初めのうちは、自分で作ったものを着るなんて恥かしかった。しかし、実際にそでを通してみると、自分の力でこんなに立派なものが作れたという達成感でいっぱいになった。クラスメイト全員がそれぞれ個性の溢れたはっぴを着てニューソーラン節を踊る。はっぴを着ることで雰囲気が盛り上がったし、恥かしいと思っていたのがうそみたいに、このはっぴを誇りに思った。

今回、自分の手で作り上げた世界に一つだけのはっぴは、私の努力と笑顔を知っているよき親友であり、大事な宝物だ。一つ一つの作業に時間がかかり、とにかく神経を使った分、作り終えた時の喜びはすごく大きいものだった。そして、家庭科の大切さ、物を作る楽しさを実感し、街で服などを見ると、どんな縫い方をしているのかを少し気にするようにもなった。作ったものを実際に使うことで家庭科に対する自信が大きくなった。今の私には、大人になるための勉強を身に付けることが大事だ。その勉強の中に、家庭科も含まれているのだと思う。これからも授業でいろいろな物を作ってみたい気持ちがあるのはもちろん、もっと難しい技術を得て物を作り、自分や周りの人に使ってもらえるようになれたらいいなと思った。

将来の夢

調布市立第六中学校　三年
木村汐里

私の将来の夢は、看護師になることです。小学校を卒業するまでは保育士になりたかったのですが、去年の夏休み、母が入院したことがきっかけで看護師の方の仕事をしている姿や、笑顔で患者さんに接している姿に憧れ、私もあんな看護師になりたいと思うようになりました。

私が何度か病院に行ったとき、たまたま看護師の方とお話をする機会がありました。母の担当になった看護師の方は男の人で、母と私に

「看護学生の時は遊ぶ時間がなくて辛かったけど、看護師という資格はこれから必要とされるものなので、この資格を取ることができて本当に良かったです。」

とお話をしてくれました。大学生の頃は看護師になりたいとは全く思っていなかったと話してくれましたが、その方のお母さんが入院生活を送ったことがきっかけで看護師の素晴らしさを知り、大学卒業後、看護学校に再度入学して看護の道に入ったのだそうです。私も母が入院していなければ看護師になりたいとは思わなかったかもしれません。

私は母が退院したあと、看護師の方が患者さんに優しく声をかけてあげたり、一生懸命仕事をしている姿が印象に残っているから、私も看護師になりたいということを話しました。すると母は、資格を取ることはきっと大変なことだろうけど

人の命を預かる大事な仕事だし、これから必要となる仕事だからね、と言ってくれました。そしてそれまで時折聞いてはいましたが、私の生まれたときの話をしてくれました。

私は予定より一ヶ月早く生まれた未熟児でした。四〇センチ、一五三〇グラム。これが私の生まれたときの身長と体重です。頭も胸まわりも、平均より五センチずつ小さかったそうです。私は生まれた日から約四十日間、病院に入院して、そのときに小児科の看護師の方にとてもお世話になったと聞きました。そして、母が不安になったときは励ましてくれたり、たくさんの赤ちゃんを自分の子どものようにかわいがり、あやしたり…。お世話をする姿を見て、大変そうな仕事だけどみんな辛そうな表情もせず、いつでも笑顔を忘れないで頑張っている姿にとても感心したと話してくれました。

この話を聞いたとき、私は生まれてから本当に多くの看護師の方にお世話になり、ここまで成長することができたんだと改めて感じ、今までお世話になった方に感謝したいと思いました。

日本は、医療機関もちゃんとしている、医者も看護師も十分いる…と今まで私は思っていました。しかし、こんなことがテレビ番組で伝えられていました。

『先進国の中で、日本は二歳以下の幼児の死亡率がトップ』

これは、本当に命の危機にさらされている子どもを受け入れる医療機関が少なすぎるためだそうです。医療機関も医者も看護師も十分足りていると思っていた私にとって、この話はとても驚くべきことでした。医者になりたいわけではないので直接子どもたちを助けることは出来ないけれど、受け入れられるよう医療機関を少しずつ増やしたり、決して簡単なこととは言えないけど、将来のために出来ることを、今少しずつ考えることが大切だと思っています。

夢を叶えるために、これからたくさんの勉強が必要となります。私は数学が苦手なので少しでも得意になるよう、毎日、一生懸命勉強したいと思います。そして高校では、看護師になるために必要となることを一つでも多く学べるよう精一杯頑張りたいと思います。

看護師の仕事は昼夜を問わずの重労働ですが、入院している患者さんや病気になった人には時間は関係ありません。その中で自分の仕事に誇りと責任をもって患者さんに接している看護師の方は、本当に素晴らしいと思います。

何年先になるかは分からないけれど、いつか私も仕事に誇りと責任をもって患者さんに接することのできる看護師に、そして患者さんを笑顔にできるような立派な看護師になりたいです。